



馬 耳 東 風

かつて、日航機 123 便の墜落事故 (1985.8)、スペース S・チャレンジャー爆発事故 (1986.1)、チェルノブイリ原発爆発事故 (1986.4) など、科学技術の粋を集めた巨大システムで相次いで事故が起こった。当時の事故調査報告書等には単純な部分の故障とか人間のミスが重なって大事故に至ったと述べられている。「技術者よおごるなかれ」と警鐘が鳴らされたが、四半世紀を過ぎた今、やはり同様なことが問題になる。「人災」とも言われる福島原発の事故をはじめ、大企業で相変わらずデータの捏造、検査の不正など、組織の信頼を失いかねない不祥事が明るみに出てくる。世界から注目された日本の製造業の実力はなぜ精彩を失ったのだろうか。優れた業績を維持している企業は、現場を重視する社風が全体に浸透しており、管理者と現場労働者の間に強い一体感があるように感じる。長年にわたり日本的雇用制度として定着していた年功序列型雇用制度には短所もあろうが、そこでは企業理念、社会人としての倫理観等が組織全体で共有されていた。職能評価制度を導入し、実力主義的雇用制度へ移行した事で、その一体感が崩れたように思われる。米国型の労使関係は米国の国民性を基礎に築かれたもので、日本の国民性には合わないのではなかろうか。実力主義的職場では人間関係に軋轢が生じ、それに因り組織内では意思の疎通が充分に行えず、「現場力」が低下しているように思われる。戦後、共に敗戦国として荒廃した国土から繁栄を築いたドイツと日本、今それを比較して見ると彼らは遙か先を行っている。我々が

失った強い倫理観と公共精神それに揺るぎない基本理念を持ったドイツ国民の言動こそ、我々の生きる指針になるべきものと思われる。

更に、最近では、企業の不祥事と同等かそれ以上に、政治や行政の不祥事が頻発している。政治家の言動を見ていると、失言として発信される本音はおよそ政治家とは思われない、人格を疑う事例もある。自分に都合の悪い情報は「Fake News」と主張する大国もある。国会答弁と記録との整合性を装うために公文書まで書き換えさせる行政組織の倫理観はどうなっているのか、一国民として理解できない。今の国会や行政運営は、国民を主権者とする「理念」「大義」を基礎に議論を戦わす場ではなくなったのではないかと疑念さえ生じる。弁護士との調整が必要な国会答弁など聞いた記憶はない。このような事態が頻発する政治・行政を見ると、国民の信頼を失うと同時に自浄能力が無いのではないかと危惧する。政治の貧困は社会の貧困に繋がる。かつて海外の記者から「日本の政治は三流」と揶揄されたことを思い出した。「人民の人民による人民のための政治」という名言を残した米国第 16 代大統領リンカーンが逝って 150 年余、大義よりも保身、打算を指針として動く国会議員は何を生き甲斐に、どこを向いて行動しているのだろうか。議員を選出した我々国民も責任を免れることは出来ない。「日本の政治は一流」と評価されるような時代は何時来るか、「技術者よおごるなかれ」と同様に「政治家よおごるなかれ」を肝に銘じてほしいものである。

(青)